

研究種目:若手研究(B)  
研究期間:2007~2009  
課題番号:19720024  
研究課題名(和文) 初期近世イタリアの宮廷祝祭の美術に関する調査研究  
研究課題名(英文) Research on the Courtly Festivals of Early Modern Italy  
研究代表者  
京谷 啓徳(KYOTANI YOSHINORI)  
九州大学・大学院人文科学研究院・准教授  
研究者番号:70322063

## 研究成果の概要:

本研究では、ルネサンス期の宮廷祝祭の構成要素たる美術、すなわち山車行列とそれを飾ったタブロー・ヴィヴァン（活人画）、沿道に設置された各種アップラート（仮設建造物、仮設仕掛装置、既存の建築物の仮設装飾）、そして祝祭を記録するメディアであったフェスティヴァル・ブック（宮廷や市当局等の祝祭主催者が当日もしくは後日に発行する公式記録）等に関して、美術史の側からの包括的な研究が従来行われてこなかった現状に鑑み、研究の基本的な枠組みの構築を試みた。

## 研究成果の概要（英文）:

This study aimed to construct a fundamental framework for the research of the art used on the occasion of Renaissance courtly festivals. 1) chariots in triumphal entry, 2) tableaux vivants adorned the chariots, 3) ephemeral constructions (*apparati* in italian) set in the streets, 4) festival books (the media that recorded the festivals).

## 交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	660,000	4,060,000

## 研究分野:人文学

科研費の分科・細目:哲学・美学・美術史

キーワード:祝祭、アップラート、行列、タブロー・ヴィヴァン、活人画、フェスティヴァル・ブック

## 1. 研究開始当初の背景

報告者は、従来ルネサンス期イタリア、特に北イタリアの古都フェッラーラのエステ

家を中心に、彼らが注文主となった美術作品に関し、そこに君主称揚の図像プログラムがいかにか巧妙に仕込まれているかを研究してきたが、その研究の過程で、君主の入市式や大規模な宴会などの宮廷祝祭に用いられた美術と、壁画などが、その図像プログラム等に類縁性を有していることに関心を持つようにいった。実際のところ、ルネサンス期の宮廷祝祭は宮廷美術家たちが手がけたことが多い。

しかし祝祭の美術は祝祭が終われば取り壊されてしまうというその「エフィメラル」な特徴から、従来、演劇史家や祝祭史、あるいは歴史家の側からの研究はあっても、美術史の側から包括的な研究がなされることは少なかった。バロック美術に関しては祝祭との関係がしばしば取り沙汰されているが、ことルネサンス美術に関しては、その研究は遅れを取ってきたかにみえる。

報告者がルネサンス美術を専門とする美術史家として、祝祭研究をおこなうための基本的な枠組みの構築を目指した本研究の背景は、以上のようなものである。

## 2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は、ルネサンス期の宮廷祝祭の構成要素たる美術、すなわち山車行列とそれを飾ったタブロー・ヴィヴァン（活人画）、沿道に設置された各種アップラート（仮設建造物、仮設仕掛装置、既存の建築物の仮設装飾）、そして祝祭を記録するメディアであったフェスティヴァル・ブック（フェスティヴァル・リヴレットとも。宮廷や市当局等の祝祭主催者が、祝祭当日もしくは後日に発行する公式記録）に関して、いかに美術史的な観点から研究をおこなうかという基本的な枠組みを構築し、その妥当性を検討することである。

また、以上のような宮廷祝祭の構成要素が、近代以降のヨーロッパの市民社会において、ひいては明治時代以降の近代日本社会において、いかに受容され、いかに変容を遂げたのかについて明らかにすることも、併せて研究の目的とした。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、人文主義者や教皇庁式部官らによる同時代の記録、日記や年代記、外国人による旅行記、フェスティヴァル・ブック、祝祭を描いた版画や素描、あるいは山車やアップラートの設計図などの各種一次資料を、現地図書館等において調査収集し、

宮廷祝祭の各種構成要素に関する具体的な検討におよぶという方法をとった。

また、宮廷祝祭の構成要素の近代以降における受容・変容に関しては、市民社会においてとりおこなわれた各種の祝祭、博覧会、あるいは演劇や大衆芸能といった分野に見られる受容の諸相について、基本的な資料収集をおこなった。

## 4. 研究成果

### (1) 宮廷祝祭の山車行列の図像および形態に関する調査研究

まず、中世とルネサンス期の祝祭行列の関係について、各種史料の収集をおこなった。ついで、詩人ペトラルカの叙事詩『凱旋 I trionfi』のテキストと写本挿絵、そして実際に取り執り行われた祝祭の記録の比較検討によって、『凱旋』図像と山車行列の影響関係について考察を深めた。

古代の凱旋行列に着想を得て執筆されたペトラルカの『凱旋』は、この時期の祝祭行列に多大な影響を与えたことが従来より知られるが、その相互関係は、単に挿絵から山車行列へ三次元化されたという方向性だけでなく、現実の山車行列のあり方が二次元の絵画表現に影響を与えることもあったことが明らかとなった。

### (2) タブロー・ヴィヴァン（活人画）に関する調査研究

タブロー・ヴィヴァン (tableaux vivants) とは、祝祭行列の山車の上、行列のおこなわれる沿道に設置された仮設凱旋門等のアップラートの上部、あるいは祝宴の執りおこなわれる広間の一角に仮設の舞台が設定され、そこで衣装を身につけポーズを取った人物が、一定時間、無言で静止する演劇の一種である（ただし、そもそも「タブロー・ヴィヴァン」というのは近代の用語であり、未だ美術用語としてのタブローの概念が成立していない中世末期ないし初期近世の宮廷祝祭における、このような無言の人物が静止して景をなしているものを指してこの語を用いるとき、厳密には「タブロー・ヴィヴァンのもの」として類推的な使用をしているに過ぎないことに留意するべきである）。本研究では、それぞれのタイプのタブロー・ヴィヴ

アンに関して、各種の資料収集をおこない、分析作業をおこなった。

また、比較研究のための新たな視点を得るため、アルプス以北の君主の入市式におけるタブロー・ヴィヴァンの使用についても調査をおこなった。とりわけ1458年、フィリップ善良公のヘント入市式、ジャンヌ・ドゥ・カスティーユの1496年のブリュッセル入市式、カール5世の1515年のブリュージュ入市式等の様子を報告するフェスティバル・ブックを中心に取り上げた。

タブロー・ヴィヴァンの図像プログラム構成上の特徴、イメージの提示法における宗教美術（開閉式祭壇画、『人類救済の鑑』等の書物）や宗教劇からの援用、および祝祭演出上のタブロー・ヴィヴァン利用の効用について、考察をおこなった。とりわけ、聖遺物展覧を含め、宗教的コンテクストにおける聖なるものの提示法との共通性が明らかとなった。

上記の内容については、「タブロー・ヴィヴァン考—その入市式における使用をめぐる」と題した論文（研究雑誌『西洋美術研究』15号（2009年）において詳細に論じた。

### （3）宮廷祝祭のアッパラートの図像、形態および機能に関する調査研究

アッパラートの仮設凱旋門に関する史料を収集し、それらを、1. 古代風凱旋入城式のしるしとしてのアッパラート、2. メッセージの展示スペースとしてのアッパラート、3. 舞台・奏楽の場としてのアッパラートに分類、考察した。

特に中心的に取り扱ったのは、歴代教皇の教皇就任時のサン・ピエトロ大聖堂からサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ聖堂への行列（いわゆる *possesso*）の際に沿道に設置された仮設凱旋門（1492年、アレクサンデル6世；1503年、ユリウス2世；1513年、レオ10世；1534年、パウルス3世等）、1536年のカール5世のローマ入市式の際の仮設凱旋門、そして1589年、フィレンツェにおけるフェルディナンド・デ・メディチとクリスティーヌ・ド・ロレーヌの婚儀の際の仮設凱旋門などである。

古代の凱旋入城式の再現であることを演出するべく、当初は古代の凱旋門の形に比較的忠実であったアッパラートの凱旋門が、多大なメッセージを収容する展示スペースとしての要請、および式典・奏楽等の舞台を組

み込む必要性などから、次第に古代的な形態を逸脱し、巨大化していく様子について観察・検討した。

その成果に関しては、とりわけ奏楽の場としてのアッパラートについて、18世紀音楽祭協会において「バッハと祝祭空間」との演題にて発表を行った（2008年9月11日、アクロス福岡円形ホール）。

### （4）宮廷祝祭を記録する媒体としてのフェスティバル・ブックについての調査研究

フェスティバル・ブックの記録する祝祭と現実に執り行われた祝祭の関係を明らかにするために、祝祭を主催した機関の発行するフェスティバル・ブックと、同時代の日記、年代記など第三者の目撃した祝祭内容を比較検討した。その結果、必ずしもそれらが一致しない事例を収集することができた。

ついで、フェスティバル・ブックにおけるテキストとヴィジュアル・イメージ（挿絵版画等）の関係について、両者の異同のある事例を収集し、さらにその理由について考察をおこなった。

頻繁におこなわれる祝祭には、雛形ともいえるものが存在し、以前に行われた同様の祝祭のフェスティバル・ブックが参照され、場合によっては以前の挿絵を踏襲するケースのあることも確認された。

### （5）宮廷祝祭美術の近代以降への影響に関する研究

宮廷祝祭を彩った様々の要素は、革命以降、市民社会に手渡され、様々なかたちで命を長らえていったことが知られる。報告者はそれらの要素がヨーロッパ近代、そして明治以降の近代日本に移入された様子についても調査をおこなった。

宮廷文化を支えた絶対主義の社会構造が姿を消した後、例えばフランス革命後の理性の祭典や最高存在の祭典においても仮設の凱旋門が制作された。また、産業革命以降、最大の祝祭空間であったといえる各種博覧会の会場は、アッパラートの展示場でもあった。その実態について、文献および図像資料収集等の調査研究を行った。

また、我が国においても、天皇を中心とする明治国家が西洋の王権の表象に多くを学んでいることは、よく知られているが、アッパラートの凱旋門は日清日露の戦役の際に

日本中を彩った。明治のハリボテ凱旋門には本家古代ローマ風のものから、あたかも竜宮城のごときものまで存在したことを、錦絵や絵はがき等の資料から確認した。

付言すると、はからずも、研究期間中に北京オリンピックが執りおこなわれたが、その際、オリンピック会場に限らず、北京の町中に各種の仮設建造物が出現し、本研究に関してきわめて有益な比較考察材料を提供してくれた。

一方、タブロー・ヴィヴァンに関しては、ハミルトン夫人らによるいわゆる「アティチューズ attitudes」（白いテュニックを身にまとった女性が、ギリシア彫刻や絵画のようなポーズを再現する、一種の演劇形式）を経て、18世紀には文字通り「タブロー・ヴィヴァン」の名を与えられて、上流階級の夜会の余興として重宝されるようになる。そして、ウィーン会議などの国際会議にあっても余興にタブロー・ヴィヴァンがおこなわれたことにより、ヨーロッパ中で上流階級の娯楽としてもはやされるようになる。さらに19世紀後半以降、それがパリやベルリンのレビュー劇場等においてショウ・ビジネスに導入されるにいたり、宮廷祝祭以来のスペクタクルを、多くの市民の娯楽に供するメディアとなる。以上の様子についても、文献および図像資料収集等の調査研究によって、多数の事例収集につとめた。

日本では、タブロー・ヴィヴァンが明治期に移入され、「活人画」と翻訳されてしばしば上演された。既に明治20年代に赤十字慈善会等の機会に在留外国人らによって活人画が行われたことが知られるが、日本人主体による本格的な活人画がおこなわれたのは明治36年である。この年には実践女学校癸卯園遊会の余興、歌舞伎座での歴史活人画興行、そして東京美術学校紀年祭で活人画が執りおこなわれたが、その実態についての知見を深めた。

さらに、大正および昭和初期の日本の大衆芸能における上演のあり方についての検討をおこなった。具体的には軽演劇やレビューの舞台における活人画を利用した演出について考察した。この点に関しては、2007年12月に東京大学文学部でおこなった集中講義においても取り上げ、学生からの様々な反応を得た。近代芸能における活人画受容に関しては今後調査を継続していく予定である。

一般書として出版した『もっと知りたいボ

ッティチェッリ』においては、日本におけるヌード・ショウの嚆矢となった、いわゆる額縁ショーの第1回公演であつかわれたのがボッティチェッリ《ヴィーナスの誕生》であったことを紹介した。

さらに、雑誌『西洋美術研究』16号（2010年秋出版予定）に、「額縁ショー」に関して詳細に論ずる論文を寄稿の予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①京谷啓徳、タブロー・ヴィヴァン考—君主の入市式におけるその利用をめぐる、西洋美術研究、査読無、15号、2009年、pp. 169-185

〔学会発表〕（計1件）

①京谷啓徳、バッハと祝祭空間、18世紀音楽祭協会、2008年9月11日、アクロス福岡円形

〔図書〕（計1件）

①京谷啓徳、東京美術、もっと知りたいボッティチェッリ、2009、96頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

京谷 啓徳 (KYOTANI YOSHINORI)  
九州大学大学院人文科学研究院・准教授  
研究者番号：70322063

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：